

トラック 9-2

ハッサニ・ムベリベリのお話を始めよう。

町に住んでいた或る娘は、彼女に結婚を申し込みに来たどんな男の申し出も断った。娘の家族は、娘がとても美しく、とても善良なので、高貴な男、スルタン、金持ちが彼女にはお似合いだと認めていた。

或る日、神は彼らを試そうとして、ジンのひとりを遣わした。ジンは人間に変身し、娘の家の前で彼女を呼びに行った。家族はこの男を受け入れた。彼らは結婚して、男は娘の母親に告げた。

「私は自分の生まれ故郷にもどります。だから、私がない間、あなたの娘を準備させておいて下さい」。

ジンは出発し、大体 15 日経ってから帰って来て言った「あなたの娘を連れて行きます」。彼は娘と一緒に出発し、ジンたちの町に着いた。彼は彼女を自分の家に住ませた。それから、彼女をそのままにして置いて、友人たちに会いに出かけ、食事を供することを知らせた「今日、君たちを招待するから家に来てくれ」。

彼がない間、若い娘とその妹は散歩に出かけた。彼女たちは道で盲目の老婆に出会い、尋ねた「ここで何をしているのですか？」。

「迷ってしまったんだよ。実は、ここには町があったけど、住民たちはジンたちに食べられてしまった。それで、私は逃げる事が出来ずにここに戻ってきたんだ。それで、あんたたちはいつ着いたのだい？」。

「おととい着きました」。

「何てこと。あんたたちはジンたちの町にいるんだよ。それでおまえさんの旦那は何という名前なんだい？」。

「ハッサニです」。

「それは、この町にいるジンの名前だよ」。

「彼が出かけて一週間になります。まだ帰っていません」。

「それは、あんたたちを食べるために友だちを探しにいったんだよ」。

「でも、どうしたら助かるのですか？」。

神が、ルフ（ロック）という名の一羽の鳥を遣わした。そこまで降りてきて、ルフと呼ばれる鳥は背中に、結婚した若い娘とその妹を乗せた。それで彼女らは家を離れた。進んで行く途中で、進行方向からやって来たダウ船と出会った。ルフがダウ船の櫂の下を過ぎると、ジンが尋ねた「ルフよ、お前は何を運んでいるんだ？」。ルフは飛び去り、ジンたちは目的地に着いた。

彼らが到着する前に、娘たちが出る時、老婆は彼女らに、食べてから便所で唾を吐き出すよう命じておいた。それから、台所や家のすべての部屋に唾を吐くように命じた。というのも、ジンが戻って来た時に、彼女らが唾を吐いた場所から、唾が彼女らの代わりに返事をするからである。

このようにしてから彼女らは家を離れた。ハッサニ・ベリベリが、仲間たちと着いて叫

んだ「誰かいるかい？」。

「はい、どうぞお入り下さい」と唾が答えた。

「さあ、お入り下さい」。

彼は入った「マリアマ、マリアマ！」。

「はい」。

「どこにいる？」。

「ここですよ、部屋の中です」。

彼は部屋に入ったが、誰も見なかったので、彼は飛んで行った「マリアマ、どこにいるんだ？」。

「私は便所ですよ」。

彼は便所に入ったが誰もいなかった。彼の仲間には既に座っていた。ジンのハッサニ・ベリベリは台所に入ったが、マリアマも誰も見つからなかった。

彼は鍋の横に穴を掘ってそこに隠れた。彼の仲間は長い間待っていたが、彼を探すことに決めた。しかし、彼らはハッサニ・ベリベリを見つけられなかった。彼らは探し続け、鍋の近くまでやって来た。彼らは穴から出ている彼の歯を見つけた。彼らはハッサニ・ベリベリを引っ張り出し、バラバラに切って、それから食べてしまった。ジンたち自身は、食べあうこと、仲間を食べることに夢中だった。このお話はこれでおしまい。